

第3章 湾岸諸国の国民国家体制の行方

保坂 修司

はじめに——歴史的枠組み

ペルシア湾（アラビア湾）と呼ばれる地域は、デイルムン文明にはじまり、共通する歴史的遺産を背景にひとつの文化圏を形成していたと考えられる。しかし、地域全体をカバーする領域国家がこの地域から生まれたことはほとんどなく、歴史を俯瞰すれば、周辺の大國やその外から侵入してくる超大国によって政治的に支配されるケースが大半であった。

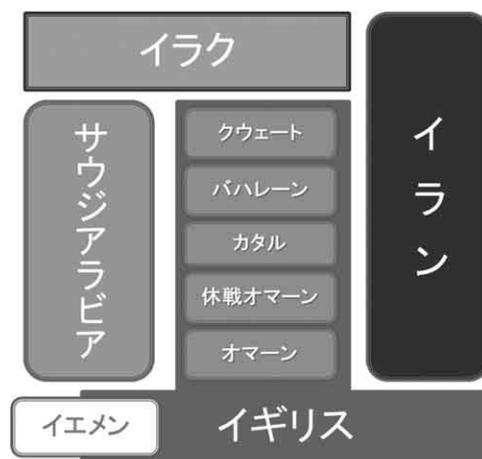
とくに16世紀以降、この地域は西のオスマン帝国、東のサファヴィー朝という、スンナ派オスマン人（トルコ人）とシーア派ペルシア人（イラン人）のあいだの結節点となり、そのことがこの地域の複雑な宗派分布を決定する重要な契機となった。

さらに18世紀以降、断続的にアラビア半島中央部からペルシア湾岸地域へのアラブ部族の大規模な人口移動がみられ、これが結果的には現在の国家形成の中核になっていく。しかし、サウジアラビアとオマーンをのぞくと、現在の湾岸協力会議（GCC）諸国のあるペルシア湾沿岸地域は、経済（天然真珠採取・中継貿易）、民族（アラブ人）、言語（湾岸方言）などで共有するものが大きいにもかかわらず、もともと統治者一族を中心とするオアシス都市というきわめて限定的な存在にすぎなかった。18世紀以降、英国がこの地域に進出すると、この地域は漸次、英国の保護領となっていくが、この過程でペルシア湾のイラン側沿岸地域はアラビア半島側から切り離され、サファヴィー朝の後継者であるガージャール朝、さらにはパフラヴィー朝の領域へと統合されていく。

図1 湾岸安全保障（18～19世紀）



図2 湾岸安全保障（1930年代）



オスマン帝国は第一次世界大戦後、崩壊し、アナトリア半島を中核とするトルコ共和国として再生、中東やバルカン半島における、かつての支配領域は独立していった。湾岸地域ではクウェート、ハサー（現サウジアラビア東部州）、カタルなどの地域が直接間接にオスマン帝国の支配を受けていたが、オスマン帝国滅亡でその頸木は完全に外れてしまう。しかし、オスマン帝国のバスラ、バグダード、モスルの3州はイラク共和国として独立、オスマン帝国の東方地域における後継者として、湾岸地域、とくに国境を接したクウェートにとって大きな攪乱要因となった。

イランは、ガージャール朝からパフラヴィー朝、そして現代のイラン・イスラーム共和国まで、民族の違い、宗派の違い、イランの領土的野心・大国としての覇権主義的傾向などで、つねに湾岸地域のスンナ派アラブ人為政者、住民にとって大きな脅威でありつづけた。

民族・宗派の問題では、湾岸地域に居住するシーア派・イラン系住民に対しイランは大きな影響力をもち、宗派に関していうと、とくに1979年のイラン・イスラーム革命は、アラビア半島側のシーア派の多い地域（クウェート、バハレーン、サウジアラビア東部州など）に深刻な治安問題を惹起する原因となった。

一方、アラビア半島側は18世紀なかばにサウード家がワッハーブ派のイスラーム純化運動をイデオロギーにアラビア半島の多くを占領、第一次サウード王国を樹立した。これがのちにサウジアラビア王国へと発展する。しかし、20世紀の後半になるまで、サウジアラビアは他の湾岸諸国と比較して圧倒的に異質な存在であり、歴史的・文化的に共有する遺産はそれほど多くなかった。いずれにせよ、彼らは当初は湾岸地域にとっての不安定要因として機能したが、最終的にこの地域の安定化に重要な役割を果たすように変化していった点は重要である。

湾岸地域はオアシスや港湾を中心とする小さな都市国家であり、天然真珠採取や中継貿易ではそぼそと生計を立てるようなきわめて儂い存在であった。したがって、オスマン朝およびその後継者であるイラク、イラン、そしてワッハーブ派といった周辺の超大国の領土的野心からみずからを守るには、あまりに脆弱であった。そこで彼らが安全保障上の基本的な政策として採用したのが、域内でもっとも軍事的に強く、もっとも領土的野心の少ない勢力と同盟し、名を捨て実を取るかたちで実質的な独立を確保する、というものであった。そのため、彼らはあるときはオスマン帝国につき、あるときはイランにつき、またあるときはワッハーブ派を受け入れるというぐあいに、安全保障の担い手を外部に求めるのが常套であった。

しかし、これらの周辺超大国は領土的野心が強く、ともすれば、一気に併呑される危険性もあった。そんなときに、登場したのが英国である。19世紀以降、インドへの道を確保しようとしていた英国は、インドと英国本土の間にある湾岸地域の重要性を認識

し、この地域の安定を希求していた。ただし、英国にとって、さして経済的な旨みのない湾岸地域は植民地とするほどのメリットはなく、交通路としても、アデンやスエズ運河、ジブラルタル海峡、そして喜望峰ほどの重要性はなかった。おそらく英国としては、湾岸の諸地域の為政者たちが、海賊対策のように、とくに海上交通路の安全をきちんと守ってくれることのほうが重要で、それぞれの都市国家を経済的に収奪しようという意図はなかったと思われる。

しかし、結果的に英国がこれらの地域を個別に保護することによって、それぞれの都市国家を支配していた一族は、周辺国の攻撃から勞せずして身を守り、さらに事実上の独立を維持することが可能になったのである。

(1) 国民アイデンティティー

また、1930年代から、湾岸地域のアラビア半島側で石油が発見されることにより、小さな都市国家は強大な経済力を身につけることになったが、いぜんとして安全保障は英国、そして英国の湾岸撤退後は米国へと依存したままであり、それまでの為政者がそのまま国王、あるいは首長、スルターンとして君臨・統治している。したがって、国家と王家・首長家とのあいだの関係が、18世紀とかわらず、未分化のままともいえる。また、国家としての基盤は強化しつつあるものの、国民国家を形成するにはあまりに人口が少なく、UAEやカタールのように、全人口の8割、ないしはそれ以上が外国人という異様な状況もみてとれる。

一方、湾岸諸国では実質的に所得税がなく、なおかつ国民の代表として選挙で選ばれる議会すら存在しない国もある。また政府の主要閣僚は、王族・首長家によって占められ、国民の政治参加は大きく制限されている。したがって、国民としてのアイデンティティーを政治面で補強するのはむずかしい。さらに他の周辺国との歴史的・文化的な相違も大きくないところから、国民としてのアイデンティティーの確立と他国との差別化が重要な意味をもつようになっている。

ただし、問題は「いかに」である。アラビア語を公用語とし、イスラームを（事実上）国教とし、同じような歴史を歩み、しかも同じような服装をし、同じような政治制度、そして同じような経済システムをもっている現状で、はたして他国と明確な差別化を図り、自国民としてのアイデンティティーを構築できるのだろうか（表1および2参照）。

たとえば、大半の日本人にとって、湾岸地域で思い起こすのは、政治・経済面をのぞけば、「沙漠」あるいはそれに付随するイメージである「ラクダ」ではないだろうか。しかし、実際にはこのイメージにふさわしいのは湾岸地域のなかでも一部にかぎられている。湾岸地域は、その名前が示すとおり、歴史的には「海」と非常に深く結びついているのだ。

ペルシア湾は古代よりメソポタミアとインドを結ぶ中継地であり、両地域との交易で

表1 GCC各国の特徴

| | サウジアラビア | クウェート | バハレーン | カタル | UAE | オマーン |
|---------------------|-------------------|--------------|---------------------------|--------------|----------------|----------------------------|
| 国家元首 | 国王 | 首長 | 国王 | 首長 | 大統領 | スルターン |
| 宗派 | スンナ (90%) | スンナ (70%) | シーア (55%) ¹ | スンナ (10%) | スンナ (15%) | イバード (75%) ² |
| 法学派 | ハンバリー | マーリキー | アフバーリー | ハンバリー | マーリキー ハンバリー | イバーディー シャーフィイー マーリキー |
| 政治制度 | 王制 | 立憲首長制 | 立憲王制 | 首長制 | 連邦制首長国 | スルターン制 |
| 政治的自由度 | 不自由7 ³ | 部分的自由5 | 不自由6 | 不自由5.5 | 不自由6 | 不自由5.5 |
| 外国人労働者 | 30% | 70% | 55% | 90% | 80% | 30% |
| 1人当GDP ⁴ | 25,852 | 56,367 | 24,613 | 93,852 | 41,692 | 22,181 |
| 五輪メダル ⁵ | S1 B2 | B2 | B1 | B4 | G1 | 0 |
| 数学五輪 | S2 B15 | B1 | 0 | - | 0 | - |

表2 GCC諸国の天然資源

| | 石油 | | | | 天然ガス | | | |
|----------|-----------------------|-------|--------------------|-------|-----------------------------------|-------|--------------------------------|------|
| | 確認埋蔵量 (億バレル・2013末) | | 生産量 (万bpd・2013) | | 確認埋蔵量 (兆m ³ ・2013末) | | 生産量 (億m ³ ・2013) | |
| クウェート | 1015 | 6.0% | 312.6 | 3.7% | 1.8 | 1.0% | 156 | 0.5% |
| サウジアラビア | 2659 | 15.9% | 1125 | 13.1% | 8.2 | 4.4% | 1030 | 3.0% |
| バハレーン | ... | ... | ... | ... | 0.2 | 0.1% | 158 | 0.5% |
| カタル | 251 | 1.5% | 199.5 | 2.0% | 24.7 | 13.3% | 1585 | 4.7% |
| アラブ首長国連邦 | 978 | 5.9% | 364.6 | 4.0% | 6.1 | 3.3% | 560 | 1.7% |
| オマーン | 55 | 0.3% | 94.2 | 1.1% | 0.9 | 0.5% | 309 | 0.9% |
| イラン | 1570 | 9.3% | 355.8 | 4.0% | 33.8 | 19.2% | 1666 | 4.9% |
| イラク | 1500 | 8.9% | 314.1 | 3.7% | 3.6 | 1.9% | 6 | |

BP Statistical Review of World Energy, June 2014.

栄えた歴史をもつ。したがって、交易に従事していた商人たちからみれば、沙漠を進むラクダ以上に、船は身近な存在であったろうし、実際、航海術は、彼らがイスラームの科学技術に貢献できた数少ない分野でもあった。

また、ペルシア湾岸地域は古くから良質の天然真珠の漁場として知られ、真珠採取産業は数千年にわたり、この地域の経済の柱であった。真珠採取は、単に真珠貝をとる潜水夫だけでなく、船をあやつる船長、その船をつくる船大工、真珠を買いとる商人、漁具をつくる職人というぐあいに裾野の広い業態であり、石油発見以前は湾岸住民の多く

が何らかのかたちでこの仕事に関与していたのである。このことは、一部湾岸諸国の国章にもきわめて明確に示されている。

たとえば、クウェートの国章は沙漠をいくラクダではなく、海に浮かぶ船である（図3参照）。国章は、その国を象徴するものであり、クウェートの国章をみるかぎり、クウェート人は自分たちを象徴するものとして、けして沙漠やラクダを想定しているわけではないことがわかる。

同様のことは、アラブ首長国連邦の国章にもいえた。彼らの国章の中央には、やはり海に浮かぶ船が描かれていたのである。しかし、2008年に新しい国章が制定され、海に浮かぶ船が、UAEの国旗に変更になった（図4の上段左と中央）。これが何を意味するのか不明だが、かつてアイデンティティーの一部として海が重要な役割を占めていたが、近年はかならずしもそれが重要視されなくなっていたことを表わすのであろうか。

したがって、現在、GCC6か国のうち国章に海が描かれているのは、クウェート以外では、カタルのみになってしまった。ただ、カタルの国章の場合、海に浮かぶ船とともに、ナツメヤシの生えた土地が描かれている（図4の上段右）。おそらく、カタル人にとっては、オアシス、あるいは沙漠での生活が海での生活と同じぐらい重要な価値をもっているという理解であろう。ちなみにカタルの以前の国章には船ではなく、真珠貝が描かれていた。もちろん、これは湾岸を代表するモチーフであり、やはり海との濃密な関係を表している。

なお、サウジアラビアの国章には、2本の交差させた剣とナツメヤシが描かれている（図4の下段左）。カタルの国章にもやはり2本の交差する剣が中央に描かれており、これは両国が、ジハードを強調するワッハーブ派の影響を強く受けていることに由来するのかもしれない。同様にワッハーブ派の影響が大きいUAEのラアスルハイマとシャルジャの国章にもやはり武器が描かれている（前者は短剣、後者は槍）。

ちなみに、湾岸諸国で王家・首長家がワッハーブ派を採用しているのは、サウジアラビア、カタル、ラアスルハイマ、シャルジャのほか、同じくUAEのアジュマーンとウンムルカイワインがある。これらのうち国章に武器が描かれていないのはウンムルカイワインだけだ。一方、非ワッハーブ派の国の国章で、武器が描かれているのはオマーンのみとなる。オマーンの国章は、1本の短剣と交差する2本の長剣からなっている（図4の下段中央）。例外はあるものの、国章に描かれた武器とワッハーブ派のあいだに何らかのつながりがあるとみても、あながちまちがいではないだろう。なお、バハレーンの国

図3 クウェートの国章



図4 GCC各国の国章



章だけ、明らかに毛色が異なり、湾岸らしさがまったく感じられない。これは、国章をデザインしたのが、当時バハレーンの顧問をやっていた英国人のチャールズ・ベルグレーブが基本デザインを行っていたからだといわれている（図4の下段右）。

（2）文化的背景

湾岸諸国と湾岸地域とは異なる概念である。湾岸諸国は一般にサウジアラビア、クウェート、バハレーン、カタール、UAE、そしてオマーンのいわゆる湾岸協力会議 GCC6 か国を指す。一方、湾岸地域とは、文字どおり、ペルシア湾沿岸地域のことであり、現在の国名でいうと、イラク、クウェート、サウジアラビア、バハレーン、UAE、オマーン、そしてイランのそれぞれペルシア湾に面する狭い範囲をカバーする。この狭い地域では、行政単位としての国家では複数にまたがっているものの、きわめて類似した文化的背景を共有している。

それは、前述のとおり、海との深く、長い関わりである。したがって、同じ国のなかであっても、沿岸地域と内陸部では明らかに文化が異なり、人びとのメンタリティーにも大きな違いがある。

沿岸部の人たちの国民的アイデンティティーを形成するうえで、重要な役割を果たすのは船と真珠である。GCC 諸国の多くがこの文化を共有しており、国民の文化的な統合を考えるのであれば、最初に思いつくものであろう。

実際、たとえば、クウェートでは毎年夏に多数の若者たちを集めて、今でも真珠採取を再現する祭を行なっている（真珠潜水遺産復興祭）。10日から数週間にわたって、若者たちが船で沖合に出て、昔ながらの方法で海にもぐって真珠貝をとり、実際に真珠を採取するというものである。

ふだん安逸な生活に慣れたクウェートの若者たちが、このときばかりは海のうえの過酷な生活に身をゆだねることになる。船のうえには身の回りの世話をしてくれるメイドもいなければ、灼熱の太陽から身体を冷やしてくれるエアコンもない。そのなかで、長ければ、何週間にもわたって、共同生活を送り、過去の歴史・文化・経済に思いをはせる。ダイバーの多くが肥満気味なところがいかにもクウェートだが、多くの政治家や財界からの支援も受け、クウェート人意識を高めるといふ点では十分に貢献しているといえるだろう。

一方、地理的に広大な領域を支配するサウジアラビアには、ジャーナードリーヤ祭というサウジアラビア国内各地域の文化や産業の促進を目的としたイベントがあり、1986年からつづいている。主催は、部族的紐帯が強いとされる国家警備隊で、各地域の名産を集めたり、伝統的な舞踊を披露したり、伝統工芸を紹介したり、といった感じである。また、ラクダ・レースなども大きな人気を集めている。

（3）部族的紐帯

沙漠やオアシスの文化と密接に関連する部族的な結びつきは、湾岸諸国の国民国家形成にとって、きわめて深い意味を有する。部族の問題を無視して湾岸諸国を理解するのは不可能であり、それだけ重要でありながら、そのあつかいには慎重な配慮も必要とされている。

とくに国民国家を考えた場合、部族民のアイデンティティーがどこにあるのかの問題は、つねに彼らの存在意義とともに考えておかねばならないといえる。つまり、彼らの忠誠心が国家にあるのか、それとも部族にあるのかという大問題である。

部族的忠誠心は、しばしば国民国家形成にとって遠心力の役割を果たす。たとえば、クウェートの立法府である国民議会の選挙では、毎回、各選挙区で主要部族による予備選挙が行われている。これは、もちろん、同一部族から多数の立候補者が乱立して共倒れを防ぐため、あらかじめ候補者を絞りこむのが目的である。政府は、この行為を憲法違反だとして、取り締まっているが、部族側はいっこうに聞く耳をもたない。結果的に当選者の部族ごと・選挙区ごとの割り振りは、ほぼ部族の人口比どおりの結果になって

しまう。

クウェートでは政党の結成が禁止されているため、政策の良し悪しで結果が出るのではなく、むしろこうした血縁・宗派によって選挙結果が左右されてしまうのである。こうした状況では、たとえ議員といえども、部族への忠誠心を明らかにしなければならず、また、同じ部族、あるいはその構成員への利益供与も部族への忠誠を示す重要な要素になるだろう。

もうひとつの大きな問題は、部族がしばしば既存の国境を越え、国際的な広がりをもっていることであろう。たとえば、シャンマル族は、シリアからイラク、サウジアラビア、クウェートまで広大な地域に分布する大部族であり、サウジアラビアのアブダラー国王の母親の出身部族であるだけでなく、イラク戦争後の最初のイラクの暫定大統領、ガージー・ヤーウェルはシャンマル族の部族長の家系であり、2013年から2014年までシリア反体制派の連合体であるシリア国民連合の議長を務めたアフマド・ジャルバーもやはりシャンマル族の族長の家系であった。

もちろん、サウジアラビアの王族であるサウード家が、もともとシャンマル族のラシード家に占領されていたリヤドを奪還し、サウード王国を復活させた歴史があるからといって、サウード家とシャンマル族が現在も反目しているということはなく、シャンマル族に独立傾向が見られるということもない。しかし、たとえば、サウジアラビア国内のシャンマル族が、同じ国内の他部族よりも、国外のシャンマル族との連帯をとる可能性は否定できないだろう。

現代においても部族は社会問題化することもある。たとえば、サウジアラビアでは学校でのイジメやケンカの原因の多くがいぜんとして部族絡みだといわれている。部族はそれだけ社会に根を張っており、部族民の忠誠心の方向によっては、国家を揺るがす存在になりかねない。それゆえ、体制側は部族の政治力を無視できず、その保護にもあたらねばならないのである。

(4) 部族と定住民

部族的な価値観を尊重し、部族にさまざまな有形無形の支援を与えることは、湾岸各国政府がしばしば政策として行ってきたことであり、これは当然、部族からの体制へのレジテマシーの付与を期待したうえでのことであった。

ただし、こうした体制側から部族への支援が行き過ぎるようなことがあれば、今度は逆に部族に対置される概念としての定住民からの支援を失うことにもなりかねない。一般に定住民とはアラビア語でハダルといい、歴史的には真珠採取業や商業、さらに知的職業に携わってきた人たちをいう。部族と対置される概念といっても、ハダルの人たちが、部族的背景をもっていないというわけではない。ハダルの多くもしばしば有力な部

地図1 アラビア半島主要部族分布
(H. R. P. Dickson. *The Arab of the Desert*)



族に系譜的に結びついている。したがって、部族（カバリー）と定住（ハダリー）の概念は、血縁というよりは、文化的なものである。つまり、部族やそれと濃密に結びつく沙漠・遊牧といった価値観を重視するか、定住生活や商業と関係する価値観を重視するか、という点である。

たとえば、クウェートのケースでいうと、クウェートを都市国家として構築するうえで重要な役割を果たしたのは、定住民であった。部族、あるいは遊牧民は、むしろその過程においては、都市国家の商業活動を妨害する攪乱要因であり、季節労働である真珠採取産業に労働者を提供する周縁的な要素であった。

一方、為政者であるサーバーフ家は、分類すれば、定住民でありながら、同時に部族の

支持を得る必要があるため、そのあいだをつなぐトリックスターの役回りをつとめていた。また、クウェートでは、歴史的にいうと、定住民が議会で重要な役割を果たしており、しばしば行政府を牛耳るサバーフ家と対立することがあった。そうした場合、定住民の力を抑えるため、部族民に積極的にクウェート国籍を付与し、議会内で政府支持派を増やそうという工作も行われた。

現在、クウェートの議会選挙は5選挙区で行われているが、このうち第1選挙区から第3選挙区は定住民が中心で、第4選挙区と第5選挙区は部族選挙区といわれている。ちなみに第1選挙区はシーア派住民が多い。

クウェートのみならず、他の湾岸諸国においても、こうした血縁や価値観にもとづく、しばしば対立する階層的な区別は厳然と存在しており、しかもそれは、宗派や民族の問題とも重層的に絡み合っている。

クウェートのアイデンティティーの中核では部族・遊牧（カバリー、バドゥー）は外的な存在にすぎないが、これがUAEやカタールでは、より中心へと近づいていく。たとえば、カタールではアラブ・アジャム・アブドの3つのカテゴリーが重要だといわれている。アラブは部族・遊牧と結びつき、アジャムはイラン系、アブドは元奴隷を指す。

クウェートは、アイデンティティーの中核を海におきながら、同時に体制を支える存在として部族的価値観を保護し、支援する。他方、UAEでは、部族的価値観を重視しながら、同時に一首長国の枠組を超えたUAE人というアイデンティティー構築を目指さねばならない。多様な国民がもつ重層的なアイデンティティーのなかのどの要素をどのように強調していくかは、国やそれぞれの歴史、そして時代によって微妙に変化していくのである。

（5）国威発揚

湾岸地域で現在の国家のかたちに向け一定の領域支配が確立しはじめるのは、18世紀以降である。国民国家を形成するうえで不可欠の「国民としての意識」を醸成するのにこの200年が十分な期間であるかどうかはわからない。

しかも、「独立」という意味でいえば、6か国すべてが短い歴史しかもっていない。もっとも古いサウジアラビアですら、1902年の「独立」であり、他の、古い歴史を誇る中東諸国と比較すると、たしかに短い。それが、それ自体は大きな問題ではないだろう。むしろ、1950年代から盛んになった、いわゆるアラブ民族主義の浸透により、湾岸諸国がアラブ民族主義の枠組のなかに含まれてしまったことは重要である。

長い歴史と豊かな文明を誇るアラブ世界の一員になったのはいいものの、サウジアラビアの一部を除けば、湾岸諸国の多くは歴史的にはアラブ文明にほとんど貢献できていなかった。アラブの一員であることを強調するべく、たとえばクウェートなどは、真珠採

取のときに歌われる歌や詩などフォークロア研究が盛んに行われたが、しかし、それらは地域的・周縁的な文化にすぎず、アラブ文明全体からみれば、些細な存在とみなされがちであった。

現代では小説などの分野においても、政府や民間レベルでのいろいろな支援が行われており、その効果かどうか、アラブのブッカー賞といわれるアラブ国際文学賞では2008年以來、3人の湾岸の作家が最高賞を受賞している。たとえ、金にものを言わせたといわれようと、徐々に湾岸諸国が文化力をつけはじめていることはまちがいないだろう（表3参照）。

一方、自然科学分野ではクウェートのクウェート科学研究所（KISR）がアラブ世界を代表する自然科学の研究開発機関となったが、かならずしもクウェート人が研究の現場で中心的な役割を果たしているわけではない。同様に、アブダビのマスダル、サウジアラビアのアブダラー国王科学技術大学（KAUST）など世界中から有名な研究者を集めて、国全体の底上げをはかっている。

表3 アラブ国際文学賞受賞者

| | 作家・作品 | 国 |
|------|---|-----------------|
| 2008 | バハー・ターヘル『夕暮れのオアシス』 | エジプト |
| 2009 | ユースフ・ゼイダーン『アザージュール』 | エジプト |
| 2010 | アブドゥ・ハール『飛び散る火の粉』 | サウジアラビア |
| 2011 | ムハンマド・アシュアリー『アーチと蝶』 ラジャー・アーレム『鳩の首飾り』 | モロッコ サウジアラビア |
| 2012 | ラビーア・ジャービル『ベオグラードのドルーズ』 | レバノン |
| 2013 | サウード・サンアウシー『竹の幹』 | クウェート |
| 2014 | アフマド・サアダーウィー『バグダードのフランケンシュタイン』 | イラク |

また、スポーツでも国民アイデンティティーの増強を目指している。人気のサッカーでは、湾岸の有力クラブチームは、国外から有名選手を集め、強化をはかっている。ナショナルチーム・レベルでは、1970年から毎年行われるガルフ・カップが知られており、事実上湾岸諸国で最大のスポーツ・イベントであり、もっとも盛り上がる国威発揚の場といえる⁶。2014年大会まででいうと、クウェートが優勝回数10回を数え、その他の国ではカタールとサウジアラビアがそれぞれ3回ずつ、UAEが2回、オマーンが1回優勝している（1990年まではイラクも参加し、3回の優勝を果たしていたが、1990年の湾岸危機で資格停止となった）。

オリンピックで活躍する選手はまだ少ないが、たとえば、カタールやバハレーンなどで

は明確なスポーツ戦略がみてとれる。2000年のシドニー五輪の重量挙げで銅メダルを獲得したカタルのアスアド・サイード・セイフは、もともとブルガリア人で、カタル・オリンピック委員会が100万ドルで手に入れたブルガリアの8人の重量挙げ選手の1人であった。陸上ではカタル、そしてバハレーンが、ケニアやエチオピアから男女含めて多くの選手を「輸入」しており、アジア大会などでいい結果を残している。しかし、こうした輸入選手が国威発揚にどの程度力を発揮するかは今のところ不明である。

また、国威発揚のためか、金持ちの道楽かはわからないが、大きな国際スポーツ・イベントを誘致してくるといえるのもしばしばみられる戦略である。カタルが2006年にアジア競技大会を開催し、2022年のワールドカップ誘致に成功したのはそのもっとも顕著な例であろう。そのほか、バハレーンやアブダビのF1開催も同じような戦略としてとらえられる。

国威発揚の道具としては、スポーツとは毛色が異なるが、カタルの衛星放送、ジャジーラもそうした役割を果たしているといえる。カタルは独裁国家であり、報道の自由もまったくないが、中東の多くの人たちが、ジャジーラ放送がアラブ世界でもっとも自由な放送局であると考えている。ジャジーラといえばカタル、カタルといえばジャジーラ、というぐあいに、カタルの、あるいはカタル人のアイデンティティー構築のなかでジャジーラの占める割合はきわめて大きいといえる。

おわりに

政治的活動が大幅に制限されている湾岸諸国の現状では、政治的に国民をまとめることはむずかしいといわざるをえない（力づくでまとめることは別だが）。しかし、その一方でそれぞれの国内には、国家を分断しかねない地域・宗派・民族・階層的な対立が存在している。地域的な問題でいうと、クウェート、バハレーン、カタルのような小さな国では問題にならないが、UAEではもちろん各首長国間の対立・格差はつねに不安定要因であるし、サウジアラビアの支配する領域は、中央部（ナジュド）、西部（ヒジャーズ）、東部（ハサー）、南部（アシール）と異なる文化圏からなっており、これらは当然、国民アイデンティティーからみれば、遠心的に機能する。また、オマーンは、かつてマスカトとオマーンと呼ばれていたように、もともとは異なる体制による複合国家であった。さらにオマーンはかつてザンジバルとガワーデル（パキスタン）に海外領土を有しており、その住民のなかにはオマーンに移住したもの、オマーン国籍をもつものも少なくない。

宗派でいえば、湾岸6か国のうちオマーンをのぞく5か国では、首長家・王家はスンナ派に属しており、シーア派はしばしば少数派として差別・迫害の対象になっていた。バハレーンでは王族はスンナ派だが、国民の過半数がシーア派である。しかし、シーア

派といえども一枚岩ではない。バハレーンのシーア派の多くはアフバーリー派という法学派に属しており、イランや他の湾岸諸国のシーア派（ウスーリー派）とは異なる。サウジアラビアのシーア派にはイラン等と同じ12イマーム派だけでなく、イスマール派やザイド派までもが一定数存在する。クウェートのシーア派も、移住元がイランやイラクのどこかによって、あるいはイデオロギーやマルジャアのちがいによって、微妙な分裂がある（マルジャアとは「法源」のことで、一般のシーア派信徒がその見解にしたがう法学者のことを指す）。

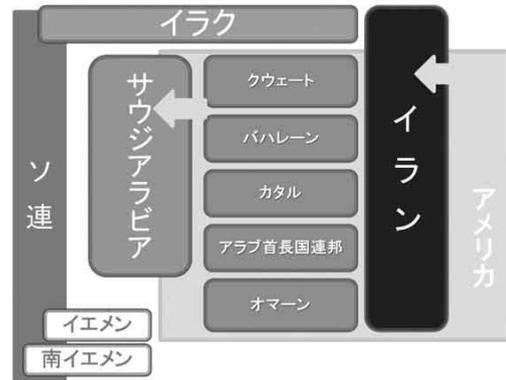
オマーンではイバード派が多数派で、スンナ派は少数派である。オマーンにおける宗派対立もけっして他人事ではない。さらにイバード派内の考えかたのちがいも、沿岸地域と内陸地域の対立において、両者の経済格差を含め、忘れてはならない要素になっている。

宗派対立に関していうと、1979年のイラン・イスラーム革命後、イラン・イスラーム共和国が湾岸諸国にシーア派革命を輸出する戦略に出たため、湾岸各地でシーア派による騒乱やテロが頻発した。湾岸諸国はこれに対処するため、新しい安全保障の枠組である湾岸協力会議GCCを結成する。公式にはこのときはじめて、サウジアラビアが、ペルシア湾沿岸の小国にとって、安全保障上のパートナーになったのである。

湾岸戦争をきっかけに、宗派対立はいったん収束の兆しがみえたものの、その後の先行きは不透明になっている。湾岸戦争後、湾岸諸国では今度はアル・カーイダなどスンナ派のジハード主義が隆盛してくる。本来、彼らの依拠するサラフィー主義という考えかたは体制を支える役を果たしてははずだが、いつの間にか体制側に牙を剥くようになっていたのである。2001年の、いわゆる9.11事件の実行犯19人のうち、15人がサウジ人、2人がUAE人であった。つまり豊かな親米国とみなされていた国から反米のテロリストが出てきてしまったのである。サウジアラビアは、反体制的で、過激なサラフィー主義者たちを抑えにかかり、逆にシーア派も含めた国民対話への道を歩みはじめた。しかし、イラク戦争やシリア内戦で、宗派対立はふたたび渾沌としつつある。

湾岸諸国では基本的に国民国家は未成熟であり、事実上国家は、王家・首長家と渾然一体となっているといっている。町中に貼られた国王や首長、大統領のポスター、写真は、国民に忠誠を強要するという意味もあろうが、同時にそれらが国家をもっとも象徴していること、換言すれば、王家・首長家が他国と差別化するうえでのベクトルとなっている

図5 1970年代の湾岸安全保障の枠組



ることも否定できず、したがって彼らこそが、国民的アイデンティティを構成する重要な要素であることも事実なのである。それぞれの国の「国史」がしばしば体制主導で行われ、王家や首長家の歴史となりがちなのは、残された歴史的資料の関係だけではないだろう。

同じような服を着て、同じようなことばをしゃべっているため、一見均質的にみえる国民も実際には、部族・定住の区別、宗派、イデオロギー（イスラーム主義と世俗主義等）等で明確な差異をもっており、これがしばしば対立軸として設定される。それゆえ、それらを包括するアイデンティティの醸成はきわめて困難な課題となる。

現時点では、多くの国民が石油収入からの恩恵を十分受けているので、ある程度までは政治的な不満を抑えることができる。「代表なくして課税なし」を民主主義の大原則とするなら、逆説的に湾岸諸国は民主主義を導入する必要はないともいえる。だが、これは、石油収入が減少して、国民にその富をあまねく配分できなくなれば、国民に政治的権利を付与しなければならないということでもある。

仮に石油の恩恵が十分得られない状況になったときに、首長家、王家を中核とする国民国家がひとつにまとまれるかどうかは大いに疑問であろう。バハレーンやオマーンなど経済的に脆弱な国で「アラブの春」が急速に伝播して、大規模な暴動が起きたことは

表4 GCC各国の支配家と政治

| 国 | 首長・王家 | 建国 | 独立 | 議会 |
|---------|-----------|---------|------|---|
| サウジアラビア | サウード家 | 1744 | 1902 | 首相は国王、外相・内相・国防相は王族 諮問評議会（勅選） |
| クウェート | サバーフ家 | 1750s | 1961 | 首相は首長家、外相・内相・国防相は首長家 一院制（国民議会） |
| バハレーン | ハリーフ家 | 1783 | 1971 | 王族が首相、外相・国防相・内相等 二院制（諮問評議会（勅選）・代議院） |
| カタール | サーニー家 | 1850 | 1971 | 首長家が首相・外相・内相・国防相等 諮問評議会（勅選） |
| UAE | アブダビ | ナフヤーン家 | 1793 | 1971 大統領はアブダビ首長、首相はドバイ首長 連邦国民評議会（選挙+勅選） |
| | ドバイ | マクトウム家 | 1833 | |
| | シャールジャ | ジョワーシム家 | 1803 | |
| | ラッスルハイマ | ジョワーシム家 | 1803 | |
| | ウンムルカイワイン | ムアッラー家 | 1775 | |
| | アジュマーン | ヌアイミー家 | 1810 | |
| | フジェイラ | シャルキー家 | 1901 | |
| オマーン | ブーサイド家 | 1753? | 1971 | 首相・外相・国防相・財政相は国王 二院制（諮問議会・国家評議会（勅選）） |

その証拠である。

彼らに富を約束している天然資源は有限であり、いずれは枯渇するものであるし、あるいは枯渇するまえに、人類が石油や天然ガスを用いなくなる時代がきてしまうかもしれない。しかも、今日、油価が大きく低落しつつあり、豊かさを持続的に国民に分配できるという保証もあやしくなりつつある。

上からの人工的な国民アイデンティティーの構築だけでは、国民国家の形成には不十分である。陰りゆく豊かさをカバーするため、今後は国民に政治的権利を付与していくことも重要であり、そのためには、差別や対立をなくしつつ、同時にそれぞれの部族・宗派などがもっている既存のアイデンティティーをも強化するという、相反する作業が湾岸諸国を待ち受けている。

さらにいえば、安全保障の枠組として構築された GCC が、今度は求心力となり、GCC 各国内の差異を希薄化する機能を果たすようになっており、とくに「アラブの春」で経済基盤の脆弱なバハレーンやオマーンが混乱したことで、GCC の「統合」の掛け声はさらに大きくなってきた。

— 注 —

- 1 ただし、王族であるハリーファ家はスンナ派。なお宗派別の人口比率は、どの国も公式のものではなく、推測にすぎない。唯一、クウェートでは有権者登録した人の宗派別・部族別の人口が公開されている。
- 2 イバード派の比率をもっと低くみつもるケース（50% 強）もある。
- 3 米 Freedom House のレポートによる。数字が小さいほど自由で、7 が最悪。
- 4 IMF の 2013 年の数字。
- 5 G は金メダル、S は銀メダル、B は銅メダル。
- 6 ただし、1991 年は湾岸戦争のため中止。

